Publisher's Review
パブリッシャーズ・レビュー
●東京大学出版会・白水社・みすず書房のPR紙●

msz みすず書房の本棚
［無料送付］
No. 11　2014 夏　（表示価格は税別です）
113-0033 東京都文京区本郷5-32-21　tel. 03-3814-0131　http://www.msz.co.jp

ギッリ先生の講義録

――こんな授業受けたかった／ノート4つのポイント

ホンマタカシ

①ギッリは自らの写真への興味を「ディレッタントかもしれない情熱」と書き始めます。

ディレッタント（dilettante）を辞書で引くと、ディレッタント（英）・（フランス）芸術や学問を趣味として愛好する人。好事家（こうずか）と書いてあります。

ギッリにとって写真とは他の表現形態と関係し、連動し相互に結びついて、さまざまなコミュニケーション分野との関係性のなかから生まれてくる学際的なメディアなんだそうです。

写真家ギッリのキャリアは、七〇年代初頭のコンセプチュアルアートに自分の写真が使われたことから始まります。この出会いは大きいと思います、人間は生まれてくる時代を選ぶことは出来ないのですから（アメリカのニュートポグラフィーという潮流の一人、ルイス・ボルツも写真を始めたと同時期にコンセプチュアルアートに出会い、そのミニマリズムやインスタレーションに影響を受けたそうです）。

ギッリは「探究」という言葉を繰り返し使います。例えば、土地についてのその環境の探究、それは私たちの内面と外的世界との不可思議で神秘的な均衡を探究すること。そしてそうすることで、自分のことを少しばかり忘れましょう、といいます。

いきなり重要な問題ですね。日本の美大の教育では個性の確立こそがもっとも尊重されています。でもどうでしょう？　みんながみんな天才的な、あるいはオリジナルな個性なんて確立できるでしょうか？　結果そうなればいいと思いますが、ギッリのいうところの世界あるいは環境の中にすでにあるもの――それは情報（例えば光）と言い換えてもいいかもしれませんが――それと自分とを切り結ぶものを探究すること、そっちのほうが現実的だとボクは思います。人間は自分一人で生きているわけじゃないんです、社会的なコミュニケーションなしでは何ひとつ出来ませんし、そもそも人間はその周囲の環境に驚くほど制限され時には誘導されて生きているのですから。

ギッリの写真の定義は続きます。

②「写真とはひとつの問題ではなく、ひとつのエニグマ。問題には解決がある。しかしエニグマとは、解決のない問題なのである」……エニグマ（enigma）を辞書で引くと、エニグマとは、西洋語で「謎」「なぞなぞ」「パズル」等を意味します。

ギッリにとって写真はもはや何かを知るためのものではなく、世界に対して問いを投げるための言語なのです。しかもその問いに対する答えは決して見つからないと確信しているが、その問いを投げかけることをやめるつもりはない、といいます。

実際、デジタルカメラが普及した現在、従来の職業カメラマンは危機を迎えていると思います。雑誌の取材の顔写真や簡単なお店取材など、はっきり言ってライターがデジカメで撮れば事たりると思います。ただ、正確に写すという技術はもう特権ではないのです。ギッリは何も芸術写真の事だけを言っているのではないと思います。答えを差し示す写真ではなく、問いを投げかける写真、いや投げかけ続ける事が今日とても重要ではないか、とギッリは提唱しています。

《モランディのアトリエ》（1989）

③「イタリアの室内」という作品が数点紹介されています。このシリーズはその環境で暮らすことについての調査だそうです、そしてその環境にある光の全体が――人工光と自然光の混合――その場所の雰囲気を決定しているといいます。

ボクも室内の拡散したアンビエントライトに興味があります。二〇〇〇年秋、イタリア地中海に面した、かつてリゾートで栄えたラッパロという街の写真フェスティバルに招待されて十日間その美しい港町に滞在し、11人の未亡人のポートレイトと部屋のインテリアと未亡人の思い出の写真アルバムを撮影したことがあります。その未亡人たちが住む自宅のリビングは、ひとつひとつ、その場にしか生起しない独特な光の構造があり、その部屋の環境を特定していました。是非ギッリ先生に見せたいシリーズです。

④「今日、コミュニケーションの点で、写真にある大事な役割は、イメージを読むプロセスの速度を緩めることです」。

私たちは途方もない視覚的混乱のなかで暮らしています。イメージが溢れている今日、特にムービングイメージの力は巨大です、テレビや映画、インターネットのYouTubeで、もう好きな番組を見放題です。それらは概して受け身です。イメージを座って受容するのです。そしてそのイメージは、ドンドン流れていきます。それに対してギッリは、写真の役割というのは受動的に受け止めるのではなく能動的にそのイメージを眺めること、そしてそこでユックリ思考できるものなのだ、といいます。

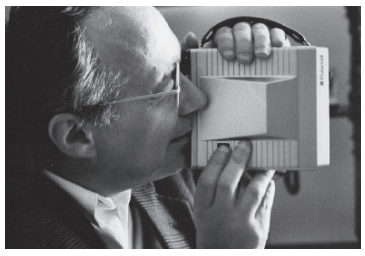
ギッリの写真理論は明晰であり論理的です。ここまで自分の仕事をちゃんと説明できる写真家は日本にはいないと思います（杉本博司さんを除いて）。日本では自分の写真を説明するのは野暮なんです。もっと天然で偶発性の高いものなんです。その良さももちろんあります。でもギッリのこの講義録を読んで、ボクは自分が今までやって来たことは間違ってなかったと確信しましたし、これからも気持ちを強くもって写真あるいは映像を「探究」し続けたいと心を強くしました。

（ホンマタカシ　写真家）

ルイジ・ギッリとは誰か 透明さの起源

ルイジ・ギッリ
《写真講義》
萱野有美訳

ルイジ・ギッリ――その名は知らずとも、「モランディのアトリエの写真」といえば、すぐに思い浮かべられる美術愛好者は多いだろう。一九四三年に生まれ、イタリア国内をこえて存在が知られ始めた九二年、心臓麻痺により世を去った。ギッリの写真は、モチーフにおいて実に多様。しかしそのトーンには、執拗なほどに一貫した透明さがある。彼はメモに書いている「思うに写真の魅力のひとつには、なにかを〈介して〉見る、ということがあるのではないか。これはスパイとかのぞき魔の行為ではなく、視線はレンズ、フィルター、すりガラス、光学機器、ファインダー、レクチルを介さなければならないこと、それから、透明なネガフィルム・ポジフィルムを見て、投影される光の円錐形のなかでほんのわずかに宙づりにされたイメージを識別しなければならないこと、バットに溜められた現像液のなかで、宙づりにされたイメージが現れてくるのを観察しなければならないことを意味しているのではないか」。


ルイジ・ギッリ

本書に収めた講義は、一九八九年から九〇年にかけて行われた。カメラ初心者の大学生に向けて、写真の歴史からカメラの選び方、メカニズムの特質、依頼写真に取り組んだときのエピソード（レコードジャケットについて。ギッリは無類の音楽好き）…を教える全13コマ。自身をプロではなくディレッタント、いわば〝写真おたく〟として位置づけていたギッリの授業からは、〝きみもレンズ越しに風景を見てごらんよ〟と熱心に誘いかける声が聞こえてくる。

写真家自身がこれほどまで丁寧に写真を論じる本は少ない。ギッリ作品はじめ関連図版253点を収録。日本で初めて本格的にルイジ・ギッリを紹介する写真集でもある。

『写真・芸術・デザイン』【六月下旬刊】
（A5変型判・256頁・五五〇〇円）

ヒヒ研究者の愛とユーモア

ロバート・M・サポルスキー
《サルなりに思い出す事など 神経科学者がヒヒと暮らした奇天烈な日々》
大沢章子訳

ヒヒの群れの二十年以上にわたる観察記と東アフリカでの異文化体験記をより合わせながら、スラップスティックなタッチで綴る抱腹絶倒のノンフィクション。

幼少の頃から大型霊長類に憧れ「大きくなったらマウンテンゴリラになる」と決めていた著者は、霊長類研究者となってアフリカ奥地でヒヒの群れの観察を始める。青臭い科学者をもてあそぶかのような理不尽だらけの東アフリカの国で、悪戦苦闘しながらヒヒたちと暮らすうち、著者は彼らへの愛着を強めていったのだが……。

ヒヒたちに旧約聖書由来の名前をつけるという強烈な諷刺にはじまって、一貫してヒヒと人間を同一の目線で捉え、両者の生活誌を諧謔味いっぱいにスケッチしながら、東アフリカの社会事情や内戦、さまざまな民族文化との遭遇を語る。

本国アメリカでは「世界一可笑しい（funny）神経科学者」という枕詞がつく著者だけに、軽妙な語り口にページを繰る手が止まらないが、「そのつもりで読んでいると、ときおり胸を打たれ、泣きたいような気分にさせられることがあって、それもまた大きな魅力である」（訳者あとがき）。

それぞれの生と格闘するヒヒたちおよび人間を大いなる霊長類愛と痛快無比なユーモアで包みこみ、最後に忘れがたい印象を残す、絶品のメモワール。［生物学・文化人類学］（四六判・424頁・三四〇〇円）

「テロとの戦い」の真相

ハリー・ハルトゥーニアン《アメリカ〈帝国〉の現在 イデオロギーの守護者たち》
平野克弥訳

帝国と帝国主義は、一時、歴史上の概念になりかけていた。それがいま、二一世紀のパラダイムとして、装い新たに戻ってきた――イラク介入に踏み切り、「テロとの戦い」を公言し実行するアメリカ合衆国が、その体現者である。

ソ連が崩壊した結果、市場経済を前提にしたアメリカの近代化論の輸出が独り勝ちとなり、「民主主義」の名の下に、帝国的野心とグローバリゼーションの合体を実現させたことは周知の事実である。

帝国主義をめぐる現在の議論も、かつての近代化論・発展理論と内実は同じ。著者は歴史の地層を一枚ずつ剥がしながら、具体的に書物、著者、大学の学部のあり方に即してこのイデオロギーの展開と再登場を分析する――ロストウからベラ、ネグリ、ファーガソン、さらに大学の地域研究、カルチュラル・スタディーズの位置づけまで。そしてアメリカがじつは、かつての大英帝国の対外政策をそのまま踏襲していることを論証する。

この超大国の地球規模の政策を理解するためには最適の案内書になるだろう。

著者は日本近世・近代史の碩学。『近代による超克』（岩波書店）、『歴史と記憶の抗争』（小社）他がある。

【目次】日本語版のための序―帝国的「現在」について／Ⅰパラダイムの帝国／Ⅱ帝国を語る／Ⅲパラダイムの理論／Ⅳパラダイムの実践／Ⅴ近代化の回帰／結論―歴史の教訓／人名索引［アメリカ政治思想史］【六月中旬刊】（四六判・200頁・三四〇〇円）

毒気とユーモア 空前絶後の書

T・ベルンハルト《私のもらった文学賞》
池田信雄訳

「ウイーン学術アカデミーのグリルパルツァー賞を受賞するにあたって背広を買わなければならなくなった。というのも授賞式の開始があと二時間に迫ったときになって急に、この明らかに特別な式典にズボンとセーター姿で臨むわけにはいかないと気づいたからだ」。小説『消去』（二〇〇四、小社刊）で日本の読者の度肝を抜き、多くのファンを獲得したオーストリアの作家トーマス・ベルンハルト。文学界のグレン・グールドとも評されるまさしく孤高の作家が、総なめにしたグリルパルツァー賞やビュヒナー賞等ドイツ語圏の最高の文学賞受賞時の状況を綴った自伝的エッセー集。文学賞受賞の場をスキャンダルに変えその内幕を描いた、笑いと涙と感動がないまぜになった空前絶後の書である。［海外文学］【六月中旬刊】（四六判・176頁・三二〇〇円）

女性と国家の関係性を刷新

関口すみ子《良妻賢母主義から外れた人々 湘煙・らいてう・漱石》

明治のはじめ、「女演説」で名をはせた女性がいた。名は岸田俊子。鮮やかな演説と美貌で注目を集めるが、演説「函入娘」で逮捕されてしまう。その後は小説家として、また女学校の教師として活躍し、良妻賢母主義と格闘した。

良妻賢母主義は、近代国家の成立に伴って作られた。そこには女性を「妻・母」としてのみ国民として認めるという明治政府の意図がある。国会開設と同時に、高等教育から女子が排除された明治期に女性の社会進出はどこまで許され、許されなかったのか。

女子教育を主張した岸田俊子、「新しい女」を率いた平塚らいてう、夫と対等に喧嘩する妻を小説にはじめて登場させた夏目漱石。良妻賢母主義から外れた人々の活躍を通して、近代国家と女性の関係を明らかにする。

［女性史］【六月下旬刊】（四六判・352頁・四二〇〇円）

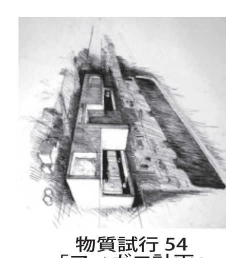
岸田俊子と生徒

定説を覆す建築論

鈴木了二《寝そべる建築》

「ル・コルビュジエに〈白〉のインスピレーションを与えたのは、ほんとうはギリシャのパルテノンであるよりもイスタンブール周辺のイスラム建築であった可能性がある。（…）とするならば〈近代建築〉には、その偽装されたヨーロッパ的起源とは裏腹に、非ヨーロッパ的なるもののＤＮＡが最初から、しかも決定的に内在していることになるだろう」

詩人・立原道造が残した資料から「だれも到達しえなかった建築の世界」を開示する表題作、二次元（メディア）と三次元のあいだを自在に往還しつつ定説を力技で覆す建築論にして写真・絵画論、そして廃墟・仮設性・記憶への問い――都心の住宅「空洞三部作」、日本芸術院賞受賞作や福島第一原発石棺化計画ほか自作をめぐる考察まで。〈9・11〉後に刊行され話題となった『建築零年』に続く待望の建築批評集。［建築・美術・現代思想］【六月下旬刊】（A5判・296頁・三八〇〇円）



物質試行54
「フィガロ計画」

科学への不信と盲信の関係図

五島綾子《〈科学ブーム〉の構造 科学技術が神話を生みだすとき》

〈科学ブーム〉とは、特定の科学技術に対する社会的関心が急激に高まり、個人・企業・国や自治体に対して、その関連研究や関連商品への投資（購買）が煽られる現象である。マイナスイオン・ブームや超伝導ブームなど、近年の事例も複数思い浮かぶほど、現代社会においてはこうしたブームの盛衰が絶えない。ブームの渦中には科学技術の効能が報道メディアを通じて誇大に喧伝され、高度な科学技術の難解さに乗じた「神話」がつくりだされ、ブームの維持のために利用される。科学技術への不信や利権の問題も、多くはブームに関連して生じているのである。

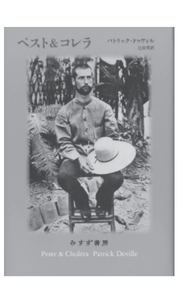
本書は〈科学ブーム〉とは何かという問いに正面から挑む類例のない試み。事例研究の対象として殺虫剤ＤＤＴのブームと、90年代のナノテクノロジー・ブームをとりあげ、ブームの拡大と終息の過程を辿り直し、ブームが生みだす神話とその裏にある科学技術の実像の関係性をあぶりだす。

ブームに簡単に踊らされずに科学技術の展望を見極めるには、どのような視点が必要なのか。ブームに費やされる莫大な資源を無為にしないために、科学行政・専門家・非専門家のそれぞれに何ができるのか。小手先の教訓ではなく、問題全体への定見を与えてくれる必読の書。

［科学論］【七月上旬刊】（四六判・288頁・予価三〇〇〇円）

ある科学者の数奇な人生

パトリック・ドゥヴィル《ペスト&コレラ》
辻由美訳



ペスト菌の学名（Yersinia pestis）にその名を留めるだけの人物の生涯は、どんなものだったのか？ 徹底した取材と斬新な手法で、百年前の生物学・細菌学を背景に描くめっぽう面白い長編小説。

アレクサンドル・イェルサンは「パストゥール団」の若き研究者。リヴィングストンにならって、学者＝探検家になりたいのだ。パリのユルム通りからインドシナに向かった彼は、香港でペスト菌を発見することになる。船乗りで医師、戦士でもある、歴史から忘却されたイェルサンは自分の一生を、科学的人文的な狂おしい冒険にしてしまう。

パストゥール周辺の人々はもちろん、詩人ランボー、作家セリーヌ、北里柴三郎らも登場して彩りをそえる。

本書『ペスト&コレラ』はフランスで出版されるやいなや大きな反響をまきおこし、ラジオや新聞雑誌に話題を提供して、二〇一二年のフェミナ賞を受賞した。『ル・ポワン』誌は「スティーヴンソン流に非日常的、ヴェルヌ作品のように謎にみちている」とまで言っている。文学としての評価だけでなく、さしずめフランス版「本屋大賞」ともいうべき「ＦＮＡＣ小説賞」も受賞、多くの読者を楽しませていることも見逃せない。

［海外文学・近代病理学史］（四六判・256頁・三四〇〇円）

みすず書房新刊（2014・1～5）

東京・文京・本郷5 TEL〇三‐三八一四‐〇一三一（価格は税別です）

人生複線の思想 ひとつでは多すぎる
外山滋比古 人生一直線、いさぎよいがこれでは危険が多すぎる。高齢化社会の多様な問題点を再点検した文化＝人生論。二四〇〇円

意味としての心 「私」の精神分析用語辞典
北山修 日常臨床語・精神医学用語はじめ日本語に息づく「日本人の心」を分析的に解説。瑞々しい連想力が輝く心の辞典。三四〇〇円

統合失調症の母と生きて
フリン 小学生の頃、母は父を「悪魔の手先」と呼び始めた……病との闘いの日々の記録。**佐々木千恵訳 森川すいめい解説** 三〇〇〇円

荒野のオデュッセイア 西部劇映画論
川本徹 『大列車強盗』『二〇〇一年宇宙の旅』ほかフロンティアイメージに潜む想像力の系譜をあざやかに解き明かす。四五〇〇円

アーレント＝ブリュッヒャー往復書簡 1936–1968
パリ亡命時からアイヒマン事件後まで、多彩な出来事と人物を背景に最愛の人と交した思想的対話三〇六。**大島・初見訳** 八五〇〇円

復興するハイチ 震災から、そして貧困から 医師たちの闘いの記録 2010–11
ファーマー 死者三〇万以上という大地震に襲われた破綻国家。その再建を目指す壮絶な闘いとその戦略。**岩田健太郎訳** 四三〇〇円

丸山眞男 話文集 続1
『丸山眞男話文集』完結後に発掘された座談など公刊。続1は「歴史と政治」ほか全6編。［全3巻］ **丸山眞男手帖の会編** 五四〇〇円

世界の見方の転換 ［全3巻］
山本義隆 『磁力と重力の発見』『一六世紀文化革命』に続く、近代科学誕生史〈三部作〉の完結篇。①②各三四〇〇円 ③三八〇〇円

死ぬふりだけでやめとけや 谺雄二詩文集
ハンセン病詩人闘士が遺した珠玉の文学といのちの証。強制隔離の中で人間の尊厳を問い、未来に希望を託す。**姜信子編** 三八〇〇円

精神療法家の本棚 私はこんな本に交わってきた
成田善弘 どんな本を読み、どんな本を書き、どのように書き手と触れ合うのか。円熟の精神療法家が綴る、本との半生記。三二〇〇円

ジャッキー・デリダの墓
鵜飼哲 没後十年、哲学者のみならず人間としてのデリダの後期著作読解を軸に、繊細かつ強靭な思考を伝える待望の書。三七〇〇円

英語化する世界、世界化する英語
ヒッチングズ 英語よ、どこから来てどこへ行くのか？気鋭が放つ異色の英語史＝スリリングな英語進化論。**田中京子訳** 六二〇〇円

ノイズ／ミュージック 歴史・方法・思想 ルッソロからゼロ年代まで
ヘガティ 実験音楽やロック、パンク、プログレ、ジャズにおけるノイズの思想と方法を考察する。**若尾裕・嶋田久美訳** 五二〇〇円

空（くう）の気 自然と音とデザインと
近藤等則／佐藤卓 最先端のトランペッターとデザイナーの対話。聴覚・視覚の感性領域を交わらせる制作のエッセンス。二六〇〇円

私はリズム&ブルースを創った 〈ソウルのゴッドファーザー〉自伝
ウェクスラー／リッツ アトランティックレコードでR&B／ソウル黄金時代を築いたプロデューサー自伝。**新井崇嗣訳** 四五〇〇円

兵士の報酬 随筆コレクション1
野呂邦暢 没後三〇年余、再評価著しい作家の精神と文体。本巻は一九六二―七七年発表の随筆他二一五編。**池内紀解説** 六八〇〇円

〈始まりの本〉
行動の構造 ［全2巻］
メルロ＝ポンティ 生理学・心理学を検証し、意識と自然の関係を問うデビュー作。**滝浦静雄・木田元訳 加國尚志解説** 各三七〇〇円

■新装復刊 ［7月］
長く読み継がれる基本書4点を、読者のみなさまへ改めて広くお届けするためにこのたび装いを新たに復刊いたします。

我と汝・対話
ブーバー 私とは何か、他者とは何であるか？ この根本的な問いの中から、人間の全体性の回復をめざす。**田口義弘訳** 三二〇〇円

全体主義の時代経験
藤田省三 「安楽への自発的隷属」はいかにして生まれるのか？ 20世紀史への深い洞察をもって社会的大変化を見すえる。三八〇〇円

臨床精神病理学序説
シュナイダー 疾病の基本を、初学者にわかりやすく、簡潔かつ明快に記述した精神医学のみごとな入門書。**西丸四方訳** 二六〇〇円

二十世紀数学思想
佐々木力 現代思想の生成過程に数学を介して立ち入り、数学基礎論論争、現象学との交流、コンピュータ社会を考察。三八〇〇円

戦争から新たな独裁主義へ

トビー・ドッジ
《イラク戦争は民主主義をもたらしたのか》
山岡由美訳　山尾 大解説

二〇〇三年三月二〇日。世界中の反対を押し切るかのように戦争は開始された。あれから丸一〇年が経過した今、独裁者サッダーム・フセインは亡き人となり、憲法が制定され、国民議会選挙も行われた。では、イラクは民主国家になったのだろうか？

PLOS Medicine 発表の論文によると、二〇一一年までのイラクにおける戦争関連死者数は約五〇万。多国籍軍発表の戦死者総計は四〇〇〇人超。大量破壊兵器は結局なかったが、この膨大な犠牲はより良いイラクと中東の安定のために払われたのだろうか？

本書の原題 Iraq: From War to a New Authoritarianism（イラク――戦争から新たな独裁主義へ）が端的に示す通り、イラクは民主国家として再生したとは言えない。アメリカが意図したような親米自由国家どころか、その影響力圏にもない。イラクを起点に中東に民主主義を広めるというドミノ理論は、今のところ実現されていない。

世界的に影響力のある英国のシンクタンク・国際戦略研究所の研究者である著者はイラク政治の専門家。ピューリツァー賞記者トマス・リクスなど、軍事分野の一流ジャーナリストらからもその分析力に一目置かれている。その彼が開戦一〇年目の昨年発表した本書は叢書の一冊として地味に刊行されたが、戦後イラク政治を知るために最良の一冊として高く評価され、同年の『エコノミスト』誌ベストブックスにも数えられた。

開戦は「外交努力を尽くした後のやむなき選択」だったと開戦支持国は言う。どの戦争でも言われる常套句である。しかし、本書が示す意図と結果の巨大な齟齬を前にしては、そのような論理は真剣に再検討されねばならないだろう。集団的自衛権で揺れる日本の将来を見据えるためにも示唆に富んだ一冊である。

［国際政治］【七月上旬刊】（四六248頁・予価三六〇〇円）

書評コラム

大澤真幸
ジョン・キーン《デモクラシーの生と死》森本醇訳を読む

デモクラシーについて、これほど詳細で包括的な歴史はかつて書かれたことがない。

本書に従えば、デモクラシーは三つの独立したカテゴリーに分割できる。集会デモクラシー（直接民主主義）、代表デモクラシー、そしてモニタリング・デモクラシーだ。モニタリング・デモクラシーは、権力の作動を監視するタイプのデモクラシーである。三つのデモクラシーはここに列挙した順に生まれているが、それらの間に直接の系譜関係があるわけではない。三つのどれの歴史に関しても、われわれの常識が誤りであることが示される。古代ギリシアも、イングランドも、デモクラシーの故郷を僭称することはできない。

ところで、デモクラシーのよさ、デモクラシーの望ましさはどこから来るのか。本書は、デモクラシーのよさを自明の前提とはせず、その根拠を明示している。デモクラシーが目指すのは、支配なき支配である。誰も無条件に他者たちの上に立って支配することは許されない。つまり、本書の論述に従えば、デモクラシーの基底にあるのは究極の謙虚さだ。

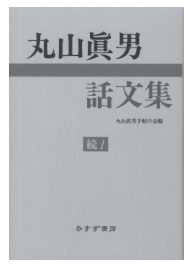
とするならば、私の考えでは、デモクラシーは一つの逆説だということになる。デモクラシーは、人民による「支配なき支配」だとして、人民は、まさにその自己否定的な支配を通じてしか生まれないからである。この矛盾を端的に見てとることができるのは、デモクラシーの歴史の実質的な中心である代表デモクラシーにおいてである。このデモクラシーが前提にしているのは、人民がまずあって代表者を選ぶという構成だが、実際には、人民は、代表されるまさにその限りで人民というアイデンティティを得るからだ。

デモクラシーが、その反対物とされている全体主義へと転化する論理的な源泉はここにある。特定の党や人物が人民を代表し、人民を純粋に具現する者として現れることがあるのだ。このとき、支配なき支配が、全面的な支配へと反転する。

デモクラシーの生と死は、この意味で隣接している。デモクラシーの歴史とは、あらゆる工夫によって、この生と死との間に距離を創り、デモクラシーを延命させることである。本書を、その実践的な工夫の豊かな記録として読むことができる。（おおさわ・まさち 社会学）▼キーン『デモクラシーの生と死』森本醇訳［全2巻］（各六五〇〇円）

「福沢における文明と独立」ほか
丸山眞男手帖の会編《丸山眞男 話文集 続2》

「生誕百年」にあたり、『週刊読書人』では黒川創・苅部直の対談が企画された思想史家丸山眞男（一九一四―九六年）。小社刊『丸山眞男話文集』全四巻の続編として、丸山眞男手帖の会発行の季刊雑誌『丸山眞男手帖』で発掘、記録された講演・座談などを集成。第2巻は「福沢における文明と独立」『福澤諭吉――近代日本の人物像』の二講演、長野オリンピック、中国と日本、『昭和天皇独白録』など時事問題について語る、丸山眞男先生を囲む会の座談二編、ほか「人権からみた日本」「現代の学生生活を語る」の全六編。［政治学・思想史］（四六448頁・予価五四〇〇円）



▼全3巻で刊行中
既刊第1巻　五四〇〇円／続刊第3巻十一月予定

▼書店フェアのご案内
丸山眞男の著作を刊行している岩波書店、東京大学出版会、未來社との合同で、七月より書店フェアを予定しております。詳細は追って、小社ウェブサイトなどでお知らせいたします。

《始まりの本》
W・ベンヤミン　細見和之訳《この道、一方通行》

「幸福とは、恐れることなく自分を見つめうる、ということである」（「裝身具」）「批評の本分は正しく距離を取ることにある」（これらのフロア貸します）――一九二八年刊行。教授資格申請論文『ドイツ悲劇の根源』の受理を大学に拒否され、アカデミズムの道を断たれたベンヤミンが独自の批評スタイルを編みあげた記念碑的作品。遊歩者としての思考、断片とモンタージュの方法など、『ベルリンの幼年時代』『パサージュ論』と同系列に属すこの現代の古典を、それにふさわしい組みと瑞々しい新訳でおくる。「朝食ルーム」「皇帝パノラマ館」「貼り紙禁止！」「プラネタリウムはこちら」など長短59篇。思想家ベンヤミンの真髄。［現代思想・ドイツ文学］（四六変・184頁・三六〇〇円）

月刊雑誌《みすず》最近号より

ラクスネール「仮想対談ジャネ、フロイトをウィーンに訪ねて…」／［新連載］舟田詠子「草の根のヨーロッパ史」（四月号）。上村忠男「シラーをサボタージュする」／［新連載］鈴木晶「いつも上天気」（五月号）。立岩真也「発達障害の時代」（六月号）。連載は、小沢信男／大谷卓史／外岡秀俊／原武史／森まゆみ／中村健之介／池内紀／宮田昇／野口雅弘／佐々木幹郎／植田実／上村忠男／辻由美／保坂和志。（各三〇〇円）

ピアニストによる ロシア的《響き》の探究

原田英代
《ロシア・ピアニズムの贈り物》

「ロシア・ピアニズムに伝承する《響き》のプロセスを解き明かしてみたい」。著者は全ソ・コンクールでリヒテルと首位を争ったロシア最長老の名匠、モスクワ音楽院教授ヴィクトル・メルジャーノフ（一九一九―二〇一二）の愛弟子だったピアニストである。

数多の卓越したピアニストを輩出し、世界を震撼させてきたロシア・ピアノ学派とは何なのか。ソ連時代も受け継がれた伝統と基本理念を体得し、発展させる資質をもったピアニストたちはいかにして養成されてきたのか。

源流となったフランツ・リストの弟子たちの教えと豊麗たる系譜。すでに習得者の少なくなった「重量奏法」。スタニフラフスキーに学ぶ感情表現。楽譜と音の関係。「語る音楽、歌う音楽」とは。身体の使い方。演奏活動の実際。

原田英代は旧ソ連邦生まれのドイツ系ロシア人の夫と二人三脚で歩み、それはそのままロシア・ピアニズムの探究であった。

メルジャーノフの教えを胸に精進しつづけるピアニストにしか書けない本書は、ピアノを弾く人にはインスピレーションを、音楽愛好家には驚きを届けるだろう。

東京芸術大学大学院で松浦豊明氏に師事した後、渡欧。ジュネーブ国際音楽コンクールやシューベルト国際コンクールで優勝し、シューベルト、シューマン、ラフマニノフの演奏は日欧で高く評価されている。ベルリン在住。

七月、武蔵野市と福岡市で開催されるローマン・トレーケル（バリトン）とシューベルト・プログラムで共演予定。

［音楽］【七月下旬刊】（四六352頁・予価三八〇〇円）

なぜ、どのように西欧近代において科学が生まれたのか？
世界の見方の転換　全3巻
山本義隆

1　天文学の復興と天地学の提唱
プトレマイオス理論の復元に始まり、コペルニクスの地動説をへて、ケプラーの天体力学へといたる 15-16 世紀の天文学の一大変革を、独自の視座で捉えなおす。

2　地動説の提唱と宇宙論の相克
コペルニクスの『回転論』に学者たちはどう対峙したか。天文学の新展開が神学や哲学、自然学の序列に関しても議論と潮流を喚起した近代科学の胎動期を描く。

3　世界の一元化と天文学の改革
ケプラーが自身の理論を打ち立てた思考過程と、それと不可分でありながら現代の科学者のものとは根本から異なる彼の哲学・科学思想のニュアンスを読み解く。

すでに古典たる評価を得た『磁力と重力の発見』『一六世紀文化革命』に続く近代科学誕生史〈三部作〉の堂々たる完結篇。15-16 世紀の自然学史上に浮沈した有名・無名の人々の構想と創意を丹念に跡付け、その思索の軌跡を読む者にいきいきと追体験させる、待望の書き下ろし。

第1巻　440頁・3400円
第2巻　392頁・3400円
第3巻　584頁・3800円

山本義隆の本
磁力と重力の発見　全3巻
1　古代・中世　三三六頁・二八〇〇円
2　ルネサンス　三二八頁・二八〇〇円
3　近代の始まり　四三二頁・三〇〇〇円
「遠隔力」が近代物理学の扉を開いた。ニュートン、クーロンまで科学史空白の千年に、力概念の形成を追う。パピルス賞、毎日出版文化賞、大佛次郎賞受賞。

一六世紀文化革命　全2巻
1　四三二頁
2　四六四頁
各三二〇〇円
一五〇〇年代ルネサンスと言われる時代に西洋に起こった知の世界の地殻変動。続く一七世紀科学革命を準備した技術者・商人・芸術家たちの実践を追う。

〒113-0033 東京都文京区本郷 5-32-21
tel. 03-3814-0131 fax 03-3818-6435
みすず書房
http://www.msz.co.jp（価格は税別です）
ニュースレター配信中．ウェブサイトよりお申し込みください

晩年の名随筆を集成

野呂邦暢《小さな町にて 随筆コレクション 2》

四二歳で世を去った、随筆の名手でもある作家が、現代に贈るコレクション第二弾。野呂の随筆でも名作といわれる「小さな町にて」（「週刊読書人」連載、一九七八年―七九年、全六〇編）をはじめ、七八年から世を去る八〇年五月まで二年間余の随筆、美術エッセイ「絵とおしゃべり」（諫早・山下画廊会員誌連載、七八年―八〇年）、六五年―八〇年発表の書評など、約二五〇編（うち単行本未収録作品約一七〇編）を収録。解題・浅尾節子、解説・岡崎武志。［文学］【六月下旬刊】（A5判・544頁・七〇〇〇円）

▼全2巻　既刊『**兵士の報酬 随筆コレクション1**』一九六二年―七七年の随筆を集成。（2面下に広告）

〈「反」知性主義という妖怪の正体〉いまこそ復刊

昨年暮から紀伊國屋書店ウエブサイト「書評空間」や朝日新聞などで紹介され、復刊のご要望が多数寄せられた**リチャード・ホーフスタッター『アメリカの反知性主義』**（田村哲夫訳、五二〇〇円）。

「アメリカの宿痾を剔抉しピュリツァー賞に輝く名著。いまや現代日本にも蔓延する「反」知性主義という妖怪。その正体を見極めるに恰好の古典」（竹内洋）。五〇年代マッカーシー旋風を受けて自国の政治文化の解明に心血を注いだ、いまこそ読まれるべき書を復刊いたします。左にご案内する**ジョル『第一次世界大戦の起原』**と併せてどうぞ。

好評既刊『空の気』

本紙昨年12月号でご案内しました世界的フリージャズ・トランペッター**近藤等則**と最先端のデザイナー**佐藤卓**の刺激的な対談集『音色の革命』は『**空の気――自然と音とデザインと**』に書名を改め5月刊、好評です。（2面下に広告）

『テクニウム』まもなく刊行

テクニウム（技術と人間が相互作用し進化する場）で繰り広げられてきた営みを辿りその法則性を生態学的に語りつくしたテクノロジー版『種の起源』、昨年3月に本紙でご案内いたしました**ケヴィン・ケリー『テクニウム――テクノロジーはどこへ向かうのか？』**が今月、いよいよ刊行。（四六判・456頁・四五〇〇円）

「四六判宣言」フェアのご案内

人文系専門書出版社の11社共同企画「四六判宣言――文庫では読めない本たち」フェアを、7月より全国の書店約百店で開催いたします。四六判（B6判に近い大きさ）は単行本の標準的なサイズ。今年15周年を迎えるフェアの参加出版社は、大月書店、紀伊國屋書店、春秋社、晶文社、人文書院、青土社、創元社、白水社、平凡社、吉川弘文館、みすず書房。ロングセラーや話題の書を集めました。本のもつ豊かな世界を味わいに、ぜひ書店へおいでください。詳細は小社ウェブサイトなどでお伝えしてまいります。

電子書籍もできました

クラウス『野生のオーケストラが聴こえる――サウンドスケープ生態学と音楽の起源』

（伊達淳訳）の電子書籍版が音声付きで登場。スマートフォンまたはiPadなどのタブロイド端末を使えば、本文を読みながらワンタッチで音声が聴ける仕様です。

「推薦したい本、絶対に読んで欲しい本等、沢山ある中で一つに絞るのは難しいと思案していたが、読みたてのこの本には、逡巡を一蹴するインパクトがあった。（…）これを読んで再び日常に戻るなら、身の回りの響きに愕然とするはずである。観察力を持ってすれば、元来美しい音を奏でていた「楽器」である地球を、響かない人工物で覆い尽くしてしまった人類の浅はかさを、誰しも嘆くことになる。」〈作曲家の川島素晴氏による書評より抜粋〉

詳しくはウェブ書店hontoの特集ページをご覧ください（http://honto.jp/cp/ebook/2014/animal-orchestra）。（希望小売価格二四〇〇円）

追悼　谷雄二

ハンセン病国家賠償訴訟の闘士として知られた詩人、『**死ぬふりだけでやめとけや　谷雄二詩文集**』（姜信子編、三月刊、2面下に広告）の著者谷雄二さんが逝去されました。奇しくも13年前の熊本・ハンセン病国賠訴訟勝利の日と同じ5月11日、享年82歳。

朗読・歌・語り等で谷さんをしのぶ会が次の日程で開かれます。7月6日14時から／18時から　馬喰町ART＋EAT（三五〇〇円・軽食付）出演：琵琶デュオ、昼のみは安田登（能楽師）、奥津健太郎（狂言師）、玉川奈々福（三味線）。予約／詳細は電話〇七〇―六五七七―一八一八。

重監房資料館開館

草津の栗生楽泉園内に、谷雄二さんが設立に尽力された国立の重監房資料館がオープンしました。ハンセン病者用監獄「重監房」（特別病室）は昭和28年に取り壊され、楽泉園内に跡地だけが残っています。暗闇、わずかな食糧、零下20度になる寒さに、93名の収監者中23名が亡くなったとされ「日本のアウシュヴィッツ」と呼ばれることもある重監房。資料館はその一部を実寸大で復元、発掘品や記録、証言、映像を展示しています。

東京国際ブックフェア2014のお知らせ

年に一度の本の祭典「東京国際ブックフェア」が、今年も有明の国際展示場「東京ビッグサイト」で7月2日（水）から5日（土）までの四日間（一般公開日は後半の二日間）開かれます。みすず書房は例年どおり「書物復権の会」の一員として出展いたします。

会員社の共有ブースでは各社が記念復刊した書籍を展示し、在庫僅少本コーナーを設置。みすず書房ブースでは話題の書、最新刊からロングセラーまで多数取り揃えます。

日頃の感謝をこめ、会期中に限り会場内限定で展示書籍を謝恩価格にて販売します。

「東京国際ブックフェア」の招待券をプレゼントいたします。ご住所・郵便番号・お名前と必要枚数を明記のうえ、6月25日までに（必着）本紙同封のハガキかhttp://www.msz.co.jpよりお申し込みください。皆様のご来場をお待ち申し上げております。

みすず書房 営業部だより

一　群馬県富岡市の富岡製糸場が「富岡製糸場と絹産業遺産群」として世界遺産に登録される見込みとなりました。週末ごとに、多くの見学者が訪れているそうです。松代藩士横田数馬の次女で一六歳だった**和田英**が、伝習工女として一年と数ヶ月をこの製糸場で過ごした日々を回想した『**富岡日記**』《大人の本棚》（森まゆみ解説、二五〇〇円）が再び注目されています。見学の前に、また後に、ぜひご一読ください。

一　第一次世界大戦開戦から今年で百年となります。史上初の世界大戦にもかかわらず日本人の関心はけっして高いとはいえなかった中、**J・ジョル『第一次世界大戦の起原』**には読者の方々から復刊の希望が相次ぎました。〈書物復権〉の一冊として書店に並びます。ぜひごらんください。

書物復権 2014

10社共同リクエスト復刊

第一次世界大戦の起原［改訂新版］

ジョル「運命の夏」へといたる歴史のダイナミズム、精神状況を再現する。**池田 清訳**　￥4200

トルコ近現代史

イスラム国家から国民国家へ

新井政美　近代国家への変身にかけた1699年からの3世紀をたどる興味津々の通史。**￥4500**

ヘーゲル伝

ローゼンクランツ　ドイツ観念論の継承発展の過程を中心に誕生から死までを描く、同時代人による伝記。**中埜 肇訳**　￥5500

みる きく よむ

レヴィ＝ストロース　創造の源泉とは？　芸術の普遍性とは？　文化人類学の泰斗が思考の快楽へと誘う。**竹内信夫訳**　￥3500

関係としての自己

木村 敏　「私」とは何か、「自己」とは何か――生命と存在への透徹したまなざしをとおして、そのありかたの謎に迫る。**￥3200**

みすず書房 近刊のお知らせ

8－9月の刊行予定のなかから いくつか選んでご紹介します

むずかしさについて
　ジョージ・スタイナー　大河内昌他訳
生存の争い　立岩真也
英語教育論　鳥飼玖美子
うつわの歌　新版　神谷美恵子
波止場日記――労働と思索《大人の本棚》
　エリック・ホッファー　田中淳訳
現代の科学・技術と社会　池内 了
狼男による狼男
　ミュリエル・ガーディナー編著　馬場謙一訳
貧困経済学入門
　A. V. バナルジー編　絵所秀紀監訳
福永武彦とその時代　渡邊一民
ボビー・フィッシャーを探して
　フレッド・ウェイツキン　若島 正訳

（ウェブサイトにもご案内　http://www.msz.co.jp）

みすず書房・最近の重版より

サードプレイス	
R. オルデンバーグ　忠平美幸訳	￥4200
認識問題　2-1	
E. カッシーラー　須田・宮武・村岡訳	￥6400
救済の星	
F. ローゼンツヴァイク　村岡・細見・小須田訳	￥9800
意味としての心――「私」の精神分析用語辞典	
北山 修	￥3400
昨日の世界　1	
S. ツヴァイク　原田義人訳	￥3200
愛についてのデッサン《大人の本棚》	
野呂邦暢　佐藤正午解説	￥2600
芸術家とデザイナー	
B. ムナーリ　萱野有美訳	￥2800
テクノロジーとイノベーション	
W. B. アーサー　有賀裕二監修　日暮雅通訳	￥3700
ピダハン――「言語本能」を超える文化と世界観	
D. L. エヴェレット　屋代通子訳	￥3400
一六世紀文化革命　2	
山本義隆	￥3200